

僕とお嬢さまの性教育

せいきょういく

Boku to ojousama no
Seiyoukoku

栗栖ティナ
挿絵
ねこうめ

立ち読み版



お喋りしたかったんだよ
剣ちゃんさっしやく

まりのみやさや
桐乃宮沙耶

聖ルキア学園の生徒会長。男女の間に壁があることを気にかけていて、お互いのことを知って仲良くなりたいと考えてお茶会を開催した。剣とは幼なじみである。

ゆうきけん
結城剣

聖ルキア学園に在籍する数少ない男子の一人。幼なじみの沙耶に誘われ、生徒会主催のお茶会に参加することになるのだが……!?

おおさきももか

大崎桃香

聖ルキア学園の副会長を務めるお嬢さま。剣に対してツンツンとした態度を取り、事あるごとに突っかかってくる。また、持っている性知識もかなり間違いだらけて!?



赤ちゃながくっついてるぞ!!



女性器が濡れるという感覚

体験させて欲しい

さいじょうみらん

西条美蘭

学園で史上最高と呼び名が高い天才少女。生徒会では書記を務めており、好奇心旺盛な性格で、剣に対しても興味津々で男性のことを聞いてくる。

プロローグ	『常識』という名の隔壁	
一章	男の子ってなに？	024
二章	『女の子』のお勉強	061
三章	色々な『性癖』	112
四章	才女の飽くなき探求心	155
五章	お嬢さま達の性教育講習	209
エピローグ	性教育は奥深い	253

あれだけ妊娠に関してありえない発言をしていた世間知らずのお嬢さまが、どうしてこんなことだけ知っているのか。

言葉が浮かんでこない少年の足元で、座り込んだお嬢さま達が語り合う。

「それは……本当なのですか、桃香さん」

「当たり前よ！ その……小さい頃、お父さまと何度か一緒にお風呂入ったことがあるんだけど、そのときに教えてもらったの。普段はブラブラして可愛いところだけど、ここを硬くした男には気をつけるって……」

「気をつけるとは？ 具体的にどういうこと」

一番好奇心旺盛なツインテールのお嬢さまが、剣の手の隙間から何とか剛直を覗き見ようと座る位置をめぐるしく変えながら問いかける。

「き、決まってるでしょ！ 赤ちゃん……赤ちゃんよっ!! 見られただけでもできるかもしれないのに、欲情した男の子の身体なんて見たら……もう妊娠確実よ！」

「……へっ？ ちょっと待って！」

結局、そこに繋がるのか。ある意味予想の範囲内といえる勘違いを叫び、セットされたシヨートヘアの頭を掻き乱す桃香の姿を見て、剣はやっと我に返った。

ペニスの変化についての知識が正解だっただけに、さつきよりも説得力が増している。沙耶や美蘭が信じてしまったら大変なことになるだろう。

「赤ちゃん……確かに、何だかそこを見ていると胸がドキドキしてきます」

「……お腹に変化は感じない。けど……確かに変な気分」

少年の不安と裏腹に、それを聞いた二人が派手に取り乱すことはなかった。

ただ揃って下腹の辺りに手を当て、少し戸惑い気味に首を傾げている。

「心の準備がまだだったのですけど。……いえ、でも、これは神様が与えてくださった機会と言えるかもしれませんね」

「興味はあった。でも、実際に体験するのはまだ早い……少し困る」

「いやいや、沙耶さんと美蘭さんまでそんな……っ」

言葉だけではなく、実際にいきり立つ怒張を目の当たりにしたインパクトのせいか。

二人とも完全に信じてしまっているようだ。それなのにまるで取り乱していないことに違和感があるが、今はそれを気にしている場合ではない。

「信じられない、さ、三人もまとめて赤ちゃん作るなんて！ 剣、あ、あんたそこまでの甲斐性あるの!? ないわよね？ でも、そこは大崎の家の力でどうにかしてあげるから、今すぐ家に来なさい。お父さまに挨拶してもらおうわよっ」

「どうしてそうなるの！ 挨拶って……」

「何よ、まさかこの大崎桃香を傷物にして逃げるつもり!? ふざけないで！ 赤ちゃんできちゃったら好きとか嫌いとか言っていられないし……し、仕方ないからあんたで妥協し

てあげるの。海より深く感謝しなさいよね」

「問題はそこじゃないから！ 見ただけで赤ちゃんができるはずないだろう！」

「でも、一緒の部屋にいたら絶対に妊娠……」

「しない、しないからっ！」

握り固めた拳をブンブン振り回し、爆乳を悩ましく揺さぶりながら執拗に妊娠をアピールしてくるショートヘアのお嬢さまを、剣は必死になって宥め続ける。

美少女達の前で恥ずかしい部分をさらけ出しているというのに、それを羞恥して頬を赤くする間もないくらいだ。

「じゃあ、どうしたら赤ちゃんできるのよ！ 私を出任せの嘘で誤魔化して責任逃れしようなんて認めないんだから。ちゃんとお嫁さんにしなさいよ!!」

「そ、それは……その……」

貞操観念が古風なのか、やたら嫁入りを迫ってくるお嬢さまに気圧されつつ、剣はどうしたものか思い悩んでしまう。

「剣さん……説明をお願いします。男女の交流を深めるためには、こういった誤解が生まれないように知識を深める必要があると痛感しました」

「覚悟を決めて説明するべき。もうそれ以外に場を鎮める方法はない」

硬い表情で真摯に訴えてくる沙耶と、相変わらず表情に変化の見られない美蘭。

二人からも迫られた剣は、天を仰いで覚悟を決めた。

(もう、こうなったら仕方ないよね)

反応した怒張を見られる。ある意味、究極とも言える羞恥を味わう羽目になってしまったのだ。もう恐い物はないと割り切るしかない。

「ここで説明できないなら、お父さまの前で言い訳しなさい。ほ、ほら、さっさと行くわよ。今日はちようどお休みで家にいるはずだから」

ちゃんと誤解を解かなければ、暴走が止まらない桃香の手で本当に家まで引き摺られていくことになりそうだ。そのときに起こる修羅場を想像すれば、今、ここで恥ずかしい思いをするほうがはるかにマシだと思う。

「わかった、簡単に説明するよ。赤ちゃんは男の子に見られたり、傍にいただけじゃできない！ ここ……男性器を使って女の子と繁殖行動をして、それで初めてできるんだよ」顔を背け、できるだけ小難しい言葉を並べて一気に叫ぶ。

甲高い声で騒いでいた桃香も、小声で何やら相談していた沙耶と美蘭も、少年の悲痛な叫びに反応して動きを止めた。

「繁殖行動……ですか？ それは……どのような……？」

「せ、性交とかセックスとか言うんだけど。その……男性器を女性器に挿入して、そのまま射精……精液っていう、赤ちゃんを作る『種』になる『精子』が混ざった液体を子宮へ

注入する。そのとき、子宮内に『卵子』っていう……精子が着床する『畑』になるものがあった場合、妊娠するんだ。それも百%じゃないんだけどね」

問いかけに応じた剣は、できるだけ卑猥な雰囲気薄い硬い単語を用いて具体的な説明を終えた。まったく想定外の内容だったのだろう、三人はポカンとした表情のまま、しばらくは言葉を発せず押し黙ってしまった。

重苦しい静けさが一分ほど続いた後。

「疑問がある。私が持っているあまり多くはない男性の身体に関する知識では、そこは水を排泄するための器官だったはず。こんな変化をする場所とは……初耳」

好奇心旺盛な才女が沈黙を破ってさらに質問してきた。

「精液もここから出るんだ。基本的にはこうして『勃起』っていうって、男性器が肥大して硬くなったとき限定だね。だから射精すれば、元に戻るよ」

「やっぱりそれ、赤ちゃんを作る準備ができてるっていう証拠じゃない！ ほ、本当に平気なの？ その……子宮に精液を注入されなければ絶対に妊娠しないのね？」

「うん。女性器に挿入して、その中で射精しなければできないよ」

まだ完全に不安を拭えないでいる桃香へ、改めて強い口調で答える。

ここで下手に誤魔化すと後々もつと面倒なことになる。できるだけ真面目で堅苦しい授業の雰囲気を作ること、卑猥なことではなく真面目な講義をしているのだと自分に言い

聞かせて、顔から火を噴きそうな羞恥を我慢した。

「男性器を女性器に挿入……ですか？ あの、じよ、女性器というのはお股……ですよね。そこにこんな太くて長い物が入るのですか？」

「裂けちゃいそうよね。想像するだけで恐くなるわ……」

「男性器が肥大するように、女性器もそのときには拡張するの？」

正面に沙耶、右手側に桃香、そして左手側に美蘭。まだ座り込んだままのお嬢さま達はそそり立つ肉幹を囲むように少しずつ近づいてきていた。

「あ、あの、そんなに見られると、ちよつと……」

丸くふくらんだ龟头から、葉脈のように血管が浮かぶ幹胴、そして付け根にぶら下がる陰囊。下腹部のあちらこちらに三人の熱い視線を感じ、慌ただしさで忘れていた羞恥がじわじわと蘇ってきた。

由緒正しい学園の生徒会室で、憧れのお嬢さまや学園有数の人気者達に発情した性器を観察されている。あまりにも現実離れたシチュエーションだが、鈴口辺りに吹きかかる熱い吐息が夢ではないのだと実感させてくれた。

「ビクビクと震えています。これは……苦しいのですか？」

ペニスのわずかな脈動に気づいた沙耶が心配そうに顔を曇らせて問いかけてきた。

「これは、あの……射精するための刺激を求めているだけというか……あははっ」

初恋の女の子の細やかな心遣いは嬉しく思うが、それだけ恥ずかしいところを凝視されているのだと改めて実感でき、頬が燃えそうなくらい熱くなってしまふ。

「少し触ってみたい。優しくすれば大丈夫？」

「えっ、あ、う、うん。軽くなら……」

眠たげな目でじっと肉竿を見つめてきていた美蘭は、少年が許可を出した途端にすぐさま右手を怒張へ伸ばしてきた。

長い袖から半分ほど覗く、細身の肢体に見合った白魚のように美しい指。それが幹胴の付け根辺りをツンと軽く突いてくる。

「んうっ！ あっ……」

浮かび上がる血管が軽く潰れ、驚くほど強烈な痺れが竿の芯を走る。

お腹の底から込み上げる声を止められず、背筋を震わせながら漏らしてしまう。

「な、何を変な声出してるのよ、剣！ そこって……敏感なの？」

「うん……その……射精って凄く気持ちいいものなんだ。だから……」

「排泄のように生活の中で必ず行わなければいけないものは、それが負担にならないように快感を伴うことが多いというのは知っている。生殖行動……赤ちゃんを作ることと同じなのね。……納得できた」

まだ恐る恐るという感じで観察するショートヘアのお嬢さまの向かい側で、才女は自分

が持つ知識と剣の言葉を絡め、納得したように頷く。

「不快でないなら……もつと触診続けさせてもらう」

勉強熱心な美蘭はそう言つて幹竿に指を這わせてきた。血管をなぞるように竿の中程まで進み、裏筋を左右に弾くように撫でながら張り出す肉傘の真下まで滑らせていく。

既にかなり火照っている幹胴でも温かく感じる腹の部分、硬い爪先。まるで違う感触に突かれ撫でられる刺激に反応し、竿の震えが激しさを増す。

「想像以上に硬い。それに熱も……これはどうして？」

「そ、それは……んうっ、あの……興奮すると血がそこに集まって……それで硬くなるらしい……んっ、はぁはぁ……」

「なるほど。血行がよくなっているから熱い……面白い」

できるだけ真面目に答える剣を横目に、美蘭は脈動を楽しむように指を這わせる。

「ちよつと、そんなに弄らないで……んくっ、ひいつ、ふぁああつ！」

何とか止めようと訴えかけるが、少し長めの爪に雁の裏側を弾かれたときの強烈な疼きに声が上擦り、思わず背筋を仰け反らせてしまった。

「大丈夫ですか、剣さん！ そんなに気持ちいいものなのですね……」

「変な声出さないでよ！ こっちまでドキドキするじゃない」

「はぁ、はぁ……ごめん。で、でも……んふっ、ううっ」

答える声にも熱い吐息が混ざり、途切れ途切れになってしまふ。

(何でこんなことに……おかしいよ！)

お茶会に誘われただけのはずが、お嬢さま達にペニスを触診されている。

想像もしていなかった展開を嘆いている間にも、脳天まで断続的に響いてくる甘美な痺れが止まることはなかった。

(ちよっと弄られてるだけなのに、気持ちよすぎるよ、これえ……)

自分の手で扱しくのはまるで次元が違う、思わず頬が緩んでしまう甘美感。

女の子——しかも極上の美少女に触れられる悦びは、想像を絶するものだった。

根元からじわじわと熱いものが込み上げてきて、三人の吐息で休みなく責められている亀頭の先っぽから透明の雫が滲み出てくる。

「きゃっ、何か出てきたわよっ……これ、おしっこ？ 汗？ まさか……精液？」

目ざとくそれに気づいた桃香が、不安げに目を伏せながら後ずさった。

それでも立ち上がって本格的に離れようとはせず、先走り汁を滴らせている先端をチラと興味深げに見つめ続けている。

「それはカウパー腺液って言って、精液が出る予兆の液体……かな。それにも少し精子が混ざってるみたいだけど」

「そ、そう。……とにかく、子宮に注入されなければ妊娠はしないのよね」

長年信じていた間違った知識を簡単には忘れられないのだろう。まだ少し不安そうな桃香は自分へ言い聞かせるように呟きながら、濡れた亀頭へ顔を寄せてきた。

「くんくん……不思議な匂いね、これ。ちよつと栗の花に似てる……青臭いわ」

「ええ。……なんでしょう、とても胸が熱くなってきました」

透明汁に濡れた亀頭へ顔を近づけてきた副会長と会長が、目を閉じ、まるで花の香りを嗅ぐようにその匂いを楽しむ。

「そんなところの匂い嗅いじゃダメだよ！ き、汚い……」

「どうして？ 赤ちゃんを作るための器官が不潔というのは疑問がある」

「うっ、そ、それは……そういうときはちゃんと風呂で綺麗にするし……」

質問好きなツインテールのお嬢さまへどうにか答えながらも、剣は目が眩むような羞恥と亀頭を撫でる吐息の感触に翻弄されてしまう。

（みんな積極的すぎるよ！ こんなのおかしい……）

清楚で上品なお嬢さま達が、多少恥じらいながらも男の性器を臆さず観賞している。

これもすべては男というものに対しての知識が乏しいせい。何も知らないから恥じらうこともないというわけだ。人並みの知識を持つ少年だけがこの状況がどれだけ淫らなのかを認識でき、その分剛直の勢いも増していく。

「ますます勃起してきました。これは射精……精液が出る予兆ですか？」

もう表皮が弾けてしまいそうなくらいふくらんできた肉槍を見て、心優しいロングヘアのお嬢さまが特に膨張している亀頭をその手で優しく包み込んでくれた。

そのまま子供をあやすような優しさで丁寧に撫で回してくれる。

「ふああっ！ う、うん。もうちよつと……限界近いから、は、離して……」

「ですが、射精をすると勃起が鎮まって元に戻ると先程仰おしやっていましたよね」
悶える少年を気遣いながら、沙耶はゆつたりと手を動かし続ける。

クチュツ……ニチュツ……。

「待って、そんな……擦ると……ふあっ、あああっ！」

しつとりと吸いつくような手の平がカウパー腺液に塗まみれた亀頭粘膜を擦り、卑猥な水音が室内に小さく鳴り響く。まるで先から溶けていくような極上の快感が脳天まで響いてきて、もう踊るように腰をくねらせずにはいられなくなってきた。

「せっかくですし、このまま射精も実際に見せていただけませんか？ 直に觀賞して学べる機会など、そうはないでしょうし……」

「私も見てみたい。射精することで剣くんも楽になるなら一石二鳥」

そう少年にねだってきたお嬢さま達。正面の沙耶は亀頭を両手で包むように握って撫で回し、左手側の美蘭は竿の根元に指を絡めて小刻みに抜き始めた。

「はあっ、うああっ、ふ、二人とも、そろそろ……やめ……んんうっ！」



憧れの人の乱れ姿に反応し、屹立はいまだ硬度を失わず勃起したまま。むしろ勢いが増して、ズボンに圧迫される痛みがそろそろ耐え難くなっていた。

「あの……ど、どうしたの？」

視線に気づいた剣は軽く前のめりになって問いかける。

手で隠したいところだが、沙耶が自らをすべてさらけ出している状況でそうするのはなんだか申し訳ない気がして必死に我慢した。

少年の問いかけにもしばし沈黙を守っていた沙耶は、張りつめた股間のテントと自らの指でほじり広げられた膣口を交互に見比べてから、小さく息をついて語り出す。

「昨日の剣さんみたいに、もう私の身体は子作りの準備が完全にできあがってしまったと思います。最後までしていただかなければ……鎮まりません」

「……へっ？ いっ、いや、待つて！ それは……」

あまりにも直球な子作り——セックスの誘いに、剣は言葉を失う。

「剣さんは……おいやですか？ 私と子作りするのは」

「嫌というか、その、そ、それはダメなことだよ！ そういうことは夫婦とか、そ、それを前提に付き合っている……本当に好きな人同士ですることだから」

魅力的な誘いではあるが、憧れの人とあくまで『性教育』の一環として交わってしまったら、一生後悔の念に苛まれて苦しむことになるだろう。

だから、これだけは受け入れられない。何としても断らないと――。

「私は問題ありません。だって……剣さんのことが好きですから」

「……はっ？」

シンプルでわかりやすい告白の台詞だが、それなのに剣は理解できなかった。

この美しく誰からも敬愛されるお嬢さまが……自分のことが好き？ まさか。

「小さい頃……ピアノ教室で剣さんと一緒に過ごしているとき、私はそれまで経験したことのない胸の高鳴りをずっと感じていました。剣さんと会えなくなつて十年近く……他の誰とお会いしてもそれと同じ気持ちを味わえたことはありません」

そこで言葉を止めた沙耶が、空いている片手で左の乳房を抱えるように持ち上げる。

「この学園で再び剣さんとお会いしてから……剣さんの顔を見る度、声を聞く度にそのときと同じ胸の高鳴りを感じてしまうんです。それが何なのかわかりませんでしたけど……今、ようやく理解しました。これは剣さんの赤ちゃんを子宮に宿したいという思い……つまり愛なのだ。……あなたをお慕いしています、剣さん」

「さ、沙耶さん……でも……」

あまりにも唐突な初恋相手からの告白。半ばかなうはずがないと諦めていただけに、こうしてはつきり聞かされても信じきれずに夢を見ているような気分だった。

「今、自分でこうしてオマ○コを弄つても……先ほど、剣さんに触れられたときのような

甘い痺れを味わえませんか。私があんなに乱れてしまったのは……それだけ剣さんを愛し、あなたの赤ちゃんを受精したいと願っているからに間違いありません」

「うっ……でも、その、ぼ、僕は……」

「剣さんは私と子作りをしたくありませんか？ オチンチンは勃起したままですけど……それは私の子宮に精子を注いで着床させたいと願っているからでは？」

いきり立つ股間を見つめながら、幼なじみのお嬢さまが真摯に問いかけてくる。

憧れのひとひとつになりたい。胸にふくらむ想いを隠すことはできず——剣は半ば無意識の内に彼女の傍へ歩み寄っていつていた。

「沙耶さん、ぼ、僕も……好き……大好きだよ」

長年想い続けていたのだから、もつと気の利いた告白をできないものか。自分自身で情けなくなるが、今は胸がいつぱいでこんな真っ直ぐな言葉しか出てこない。

「嬉しいです、剣さん。その言葉が本心でしたら……お願いします。大好きな剣さんのオチンチンで……初めての子作り、経験したいんです」

真っ直ぐな言葉と共に向けられた微笑みは、彼女に一目惚れした幼い頃と変わらない美しさ。込み上げてくる甘酸っぱい気持ちに嘸み締め、剣は覚悟を決めて頷く。

「うん。僕もしたい……沙耶さんと子作り。するよ……しちゃうからね」

「はい。……初めてなので不調法をしでかすかもしれません……お願いします」

さすがに緊張してきたのか小さく肩を震わせながら、沙耶は椅子の上でむっちりとしたお尻を滑らせて蕩けた蜜園を突き出してきた。

さっきまでの余韻と彼女自身の指で解された膣口は、もう剣のことを待ちきれないと言わんばかりにヒクヒク蠢き広がっている。

すっかり理性を吹き飛ばされてしまった少年は夢中でズボンのファスナーを下ろして勃起した肉槍を取り出すや否や、初恋の幼なじみへ覆い被さった。

「入れるよ。沙耶さんのオマ○コに僕のオチンチン……」

そう改めて宣言しながら怒張の先端を肉唇に密着させる。

ニチュツ……小さな音を響かせながら龟头に絡みついてくる肉ピラに促され、そのまま先っぽが綻ぶ膣口に軽く埋まった。

「は、はい。……本当に入ってしまうのですね。こんなたくましくて硬いオチンチンが、私のオマ○コに……し、子宮の中まで届いてしまいそうです」

「大丈夫、ちゃんと優しくするから……ね？」

さすがに不安が込み上げてきたのか眉を顰めるお嬢さまへ囁きかけ、剣は一気に貫いてしまいたいという衝動を押し殺して腰を進めていく。

じゅぶつ……ずぶふう——ずつぶふうっ！

「ひいっ……あひいい！ きてます……太いオチンチン。私の中に……ふあああっ!!」

唾液や愛蜜をたっぷり塗って解した膣口は、想像していたよりはスムーズに屹立を迎え入れてくれた。だが、雁首の辺りまで埋まったところで肉道全体が潰れたように狭まり、少し力を入れた程度では進むことができなくなってしまう。

「くっ……ここ……しょ、処女膜……なのかな」

「はああ、処女膜……ですか？」

「子作りしたことがない女の子は、膣が塞がっているんだ。それを突き破らないと全部入れられないんだけど……多分、痛いと思う。……どうする？」

入り込んでいる亀頭が焼けるように熱い膣壁で押し潰されそうな感触に声を震わせながら、剣は息を荒くしている沙耶へ問いかけた。

一気に進めたいという衝動に背中を押されているが、自分を信じて求めてくれたお嬢さまの初体験をできるだけ最高のものにしてあげたいという気持ちで我慢する。

「んっ……問題ありません。なにかを得るときに痛みは付き物ですから……どうぞ、このまま構わずに……全部入れてください。私の処女膜……剣さんのオチンチンで破って」

「沙耶さん、うん。わかった……それじゃ……いくよ」

ほとんど悩むこともなく頷いてくれたお嬢さまに改めて愛しさを感じつつ、剣は軽く深呼吸をして腰に力を込めた。

ずぶっ、ずぶぶぶうっ、じゅっぶうううううっ！

「劍さん……んくっ、あああつ、中に……私の膣っ……オマ○コが広げられて、オチンチンが一気に……ふああつ、イッ……あつ、あひいいいいっ!!」

部屋の外まで聞こえそうな甲高い嬌声を聞きながら、劍は肉槍を突き進める。

狭い膣道を亀頭で強引に押し広げ、何かが破れるような感触が伝わってきた直後、そのまま止めることなく根元まで埋めていった。

「あぐっ、ううっ……けえ、劍さあ……んふっ、はぐっ……」

「もう少し……うぐっ、あああつ!」

鈴口の辺りにヌルリと熱い壁が衝突した瞬間、お嬢さまは背もたれに預けている上体を大きく痙攣させて言葉にならない熱い吐息を零した。

「入った……ぜ、全部……」

膣粘膜全体が波打ち、ゴツゴツと硬い剛直全体へびつたりと吸いついてくる。

その情熱的な歓迎に身を委ねて動きを止め、沙耶の様子をうかがう。

「はあつ、あつ……あああつ。オマ○コ……や、火傷しそうなくらい熱くてヒリヒリしています。子宮が下から押されて……くふっ、こ、これが挿入……オチンチンを挿入される感覚……凄い……指や舌とはまるで違います」

短距離走の直後みたいに激しく息を切らし、こぼれさせた双乳を悩ましく揺らしているお嬢さまの瞳は涙で潤み、痛みを耐えるように小さく唇が震えていた。

結合部を覗き込むと、幹胴で端が裂けてしまいそうなくらい丸く押し広げられた穴口から赤い破瓜の証が愛液と混ざって溢れ出てきている。

「どうしよう、抜いたほうがいいかな？」

氣遣う剣にお嬢さまは小さく首を横に振って返してきた。

「こ、このまま……お願いします。痛みより……んふっ、はあ、オチンチンが当たっている子宮の入口が疼いて……こちらのほうが我慢できそうにありませんから」

沙耶が切々と訴える声に合わせて、奥の粘膜壁が物欲しげに蠢き始めた。密着する鈴口が強く締めつけられ、そのまま吸われるような強い刺激が尿道まで伝わってくる。

思わず唇を噛み締めてしまうほどの甘美な快感。何よりここまで情熱的に自分を求めてくれている愛しいお嬢さまの想いに気持ちが高揚してしまう。

「それじゃあ……続けるよ。あの……さっきの舌みたいにおチンチンを入れたり出したりしないといけないんだ。慣れるまで痛いと思うけど……いいね、沙耶さん」

「はい。ですけどひとつだけ……さ、沙耶ちゃんと……呼んでいただけませんか？」

緩む紅色の唇から飛び出した予想外の求めに、剣は思わず目を丸くする。
沙耶ちゃん。それは小さい頃の懐かしい呼び方だ。

「あの頃……剣さんにそう呼んでいただく度に胸がドキドキしていたんですよ。今もきつと……はふっ、同じだと思います。私にもっと……赤ちゃんの作り方を教えてください。」

大好きな剣くんのオチンチンで……」

お嬢さまが少し恥じらいながら呟いた呼び方も、昔懐かしいものだ。

あの頃の甘い思いが胸に蘇り、それが成就した喜びに全身が粟立つ。

「うん。教えてあげるよ、沙耶ちゃん。僕も初めてだけど！ 頑張つて教えるからっ」

燃え上がる想いを叫びながら、剣が無我夢中で腰を動かす。

ずちゅっ、ずぬううっ、ぬぷりゅっ!!

「ひゅっ、くうう！ ああっ、で、出入りしています。剣くんのオチンチン……私のオマ

○コ……んふっ、はあ、これが子作り……ひいつ、あああっ！」

窮屈な膣道へ溢れる淫液を塗り込むように、硬い怒張を往復させる。

熱い肉壁はそれに合わせて震えながら幹胴を締めつけてくるが、動きを妨げるほど強く

は圧迫してこなかった。

力を入れるとどうにか抽送を続けられる、締めつけと摩擦を程よく味わえる絶妙なきつさ。心優しいこのお嬢さまの性格を表す極上の感触だ。

「はあはあ、何となくわかりましたあ……き、昨日は手でしたように……オマ○コでオチンチンを扱いて射精していただくのが、子作りの基本なのですね」

「うん。手よりも熱くてヌルヌルで気持ちいいし……んうっ、お、女の子もオマ○コの中は性感帯だから、一緒に気持ちよくなれるんだ」

「はあ、はい。痛いだけじゃなくてどんどん熱くなって……んふっ、はあ、それに好きな人と……剣くんと一緒に感じ合えるというのがとても幸せ……くふああっ♪」

夢中で腰を振って膣壺を掻き混ぜていくと、痛みで強張っていたお嬢さまの表情が急速に緩み、漏れる声もより甘ったるく艶やかなものに変わってきた。

膣粘膜は入口から奥へ向かって休みなく蠢き、より多くの摩擦快感を肉槍へ与えようと一生懸命になっている。

「沙耶ちゃん、き、気持ちいいよ。僕ももつと……頑張る」

自分ももつと彼女を喜ばせたい。不慣れた腰使いだけでは物足りない、何か他の方法を探していた剣の目に突き上げに合わせて悩ましく揺れる巨乳が飛び込んできた。

「胸……また触っていい？ もつとオマ○コ濡らして、子作りしやすくしてあげたい」

「はあっ、はいっ、どうぞ……剣くんにお任せします。もう……私……頭がポーツとしてあまり考えられないので。はあ、強く……はふう、ふあああ」

息絶え絶えになりながらも、ロングヘアの生徒会長は軽く身体を揺さぶって肘近くまで制服とシャツの袖をずらしてほとんど半裸に近い格好になってくれた。

押さえつけるものは何もないのに、それでもまだお椀型の形を保っている双丘を、剣は間髪容れずに両手で鷲掴みにした。

「沙耶ちゃんのおっぱい……やっぱり気持ちいい」

先ほども堪能した柔らかさと弾力が極上のバランスで合わさっている乳房。そこを大胆に円を描くように捏ね回し、さらに勃起している乳首を指の間で挟む。

「乳首……あふっ！ ああつ、そこ……またジンジンきちゃいますっ……さつきよりもお腹の奥……し、子宮に響いて……んふっ!!」

熱くふくらむ肉粒を強く押し潰す度、沙耶は我慢できないと言わんばかりに片目を瞑って狂おしい嬌声を上げる。

抱き締める身体の火照りもどんどん増してきて、特に膣内は往復する肉幹が今にも溶けてしまいそうなくらいの熱さになってきた。

「ああ、感じます……子宮の奥、とても切ないの。はあはあつ、精子……剣くんの精子を今すぐにも受け入れて着床させたいです。お願い……お願いしますっ」

「はあはあ……え、えつと……でもっ……」

「私はもう剣くんと一生添い遂げる覚悟です！ だから、最後まで経験させてください。膣内でオチンチンが射精する感触……ああ、熱くてドロドロの精液に子宮を打たれて、中に流し込まれるのもっ……んふっ、ダメ……もう、想像するだけでえ。また、きちゃいます……さつきと同じ……イク……私、剣くんのオチンチンでイクますっ！」

沙耶が息絶え絶えで叫ぶのに合わせて膣壺の締めつけが強くなった。壁面のうねりも加速し、子宮の中に剛直が吸い込まれてしまいそうなくらい抜き吸われる。

肉粘膜に刻まれている皺も一本ずつが震えて竿肌を舐め、膣口は絶対に離したくないと訴えるように根元を噛み締めてきていた。

「んあつ、あああつ！ これ……すごつ、ひつ、うううつ」

狂おしく膣内射精を、子宮に精液を流し込まれることを望む動き。

絶頂を身体が完全に受精する準備を整えた証拠ときつき沙耶が言っていたが、それが本当のことなんだと理解できる。

言葉と身体でこんなにも情熱的に求められて、我慢できるはずがない。

「あふつ、はあ、剣くんのオチンチンが震えてるのつ、オ、オマ○コに感じます。昨日と同じ……しやせえ……精液出す前触れですよ。はあはあ、どうぞこのまま私の子宮の中へ全部射精して……子作り、最後まで体験させてくださいませっ！」

卑猥な単語をそうと知らず堂々と叫ぶロングヘアのお嬢さまが、薄い陰毛に覆われた恥丘を少年の下腹部へ押しつけるように腰を突き出してきた。

ヌプリユツ、ズップウツ、ジュプリユウウウウツ！

元々深く埋まっていた剛直がさらに突き進み、行き止まりの肉室を押し潰さんばかりに突き上げる。同時に濡れ蠢く膣壁が窄み、脈動も許されなくらい幹胴が圧迫された。

「出るっ、僕……もう出ちゃうっ！ 沙耶ちゃんのオマ○コで射精……ううっ」

「はあ、はいっ！ どうぞ、射精……私の子宮に射精して……精子、中に出してっ」



桃香、美蘭、うっとり頬を緩めたお嬢さま達が続けて語る声を聞きながら、見学者達は蜜汁に塗れた割れ目とまだまだ勃起を継続している少年の屹立を交互に見比べていた。

「本当に入るのでしょうか？ いくら濡れていても……」

「お腹が苦しくなりそうです。そんなことで気持ちを……愛を深められるのかどうか」

口々に不安を呟いてはいるものの、どの子も始めたばかりの頃は青ざめていた頬が朱に染まりつつある。

学園内で敬意を集める生徒会の三人の言葉であるし、その顔は恍惚と上気して普段決して見られないくらい妖艶な雰囲気を漂わせているのだ。

彼女達の中で子作りに対しての期待がふくらむのは至極当然だろう。

それは——お嬢さま達の恋人である少年も同じだ。

(セックスしちゃうんだ。こんな大勢に見られながら、みんなと)

いまでも自分の屹立を恐る恐る見つめる女子生徒達の視線を感じている。

交わるころまで見られると思うと顔から火を噴きそうなくらい気恥ずかしいが、同時に鼓動も未体験の快感への期待でおかしなくらい高鳴ってきた。

その気持ちを訴えるようにそそり立つ肉槍が雄々しく脈打つ。

「ふふっ、剣くんも準備できていますように……始めましょうか」

「それじゃあ予定どおりひとりずつね」

「ただ挿入するだけではない、色々な方法と感じ方を実践する」

淫らな輝きを瞳に浮かべた恋人達が、息を荒くする少年へ手を伸ばす。

「……うん」

すぐにその手を取った剣は促されるまま用意された椅子へ腰を下ろした。

「こうして、オマ○コの入口にあてがって……後は一気に……はあ、きいつ、きますつ、剣くんのオチンチン、中にい……くふつ、はあ、あああああつ!!」

ずりゆうつ、ぬぷつ、じゅぶうつ!

歓喜に声を震わせるロングヘアのお嬢さまが、少年と向き合って抱き締めるようにしながら腰を下ろしてきた。

艶やかな桃尻がふとももに接触すると同時に、蜜壺を貫く剛直の先端が行き止まりの肉室を強く押し上げる。

「はあ、凄い……もう根元まで全部つ、はあはあ」

「はい。みなさんもご覧になれますか？ 私と剣くんが繋がったところお……」

沙耶はぐったりと剣へ状態を預けながら、スカートの裾を大きく捲る。

見守る女子生徒達のほうへ軽く突き出された桃尻があらわになり、赤黒い肉槍が秘所へ突き刺さっているとこも丸見えになった。

「ほ、本当に入っていますわ」「入口があんなに広がって……」

太い幹胴が小さな肉壺へ埋まっている光景はかなり衝撃的だったようだ。お嬢さま達は啞然と目を見開いて口々に驚きの声を漏らす。

「ふふっ、こうして身体が繋がることで心も繋がって……んふっ、はあ、より深くわかり合えるのです。オチンチンだけではなくこうして……ちゅぱっ、ちゅうっ」

スカートから手を離れた幼なじみは少年の腰を抱き寄せ、そのまま発情して赤く染まった唇を夢中で押しつけてきた。

「沙耶ちゃん……んふっ、ちゅっ、はむっ、じゅるっ」

「はあっ、剣くん、は、激しく……はふうっ……んうっ！ おっぱいもオマ○コも唇も全部まとめてたくさん愛してください。恋人同士の子作りがどれだけ幸せで甘いものなのかをみなさんに見ていただきたいです……見せたい……んちゅっ、あんっ」

剣の唇を舌先でこじ開け、口内を熱く舐めしゃぶりながら求めてくる幼なじみ。

めでたく結ばれた初恋のお嬢さまの求めに応え、剣は自分からも積極的に舌を絡めながら力強く腰を突き上げる。

ジュップウツ、ズリュウツ、ヌチュウツ！

「ひぐうっ、くんっ！ あはあっ、はあ、そう。それえ……子宮、いっぱい突いてください。オチンチンで入口を解すみたいにい……くふあっ、はああっ♪」

白濁の残滓と愛液で妖しく濡れ輝く剛直がお嬢さまの蜜壺を素早く往復する。

言われたとおり力いっぱい奥を打つとその度に全体が震えながら収縮し、ふくれあがった幹胴全体をきつく圧迫してきた。

その度に甘美な疼きが芯で弾けて、腰使いも自然と激しくなっていく。

「あはあつ、ああつ、熱いですうつ、オチンチンでゴリゴリされてつ、はあつ、もう、私……イイツ……感じて……ふああつ、くふああつ！」

沙耶は普段の落ち着きある清楚な雰囲気や嘘のように長い髪を振り乱して喘ぐ。

出入りに合わせて結合部から白濁した愛液が飛沫となって散り、少年のふとももが付け根から膝辺りまでびっしりと濡れてしまっていた。

「そ、そんなに激しく動いて……痛みはないのですか？」

その動きに圧倒されていた見学者の中、ひとりが小声で呟き漏す。

甘く乱れながらもそれを聞き逃さなかった沙耶は、すぐに何度も頷き返した。

「はあ、はいい、心地よく痺れてとても幸せな気持ちです。は、初めてオチンチンをお迎えしたときは痛みもありましたが、それもすぐに消えました。んふうつ、い、愛しい人と赤ちゃんを作っているという充実感……本当に素敵でえ……止められませんかっ！」

唇の端から涎を垂らしてしまいうくらい蕩けきった生徒会長は、自らも跳ねるように全身を揺さぶり始めた。

ズチイイイツ、ズツプツ、ヌチユウツ!

「はあつ、あはつ、もつと深いところまでオチンチンが……ンンンツッ!」

沙耶が腰を落とす度に亀頭が行き止まりの熱粘膜に食い込む。

肉室の中まで入ってきて欲しいと言わんばかりに締めつけられ、特に敏感な傘のところを中心に意識が途切れてしまいそうなくらい強い快感が弾ける。

「沙耶ちゃん、はあはあ……僕ももつと激しくつ……」

「はあ、はいっ。私達の愛情いっぱいの子作り、もつともつとみなさんに見ていただきたいです。幸せな姿、見られたい……んっ、はあ、ちゅっ、んちゅううっ!」

沙耶は大きく頷きながら、その昂りを分かち合いたいと言わんばかりに夢中で唇を重ねてきた。舌同士を休みなく絡め、垂れる唾液のせいでお互いの口元がベトベトだ。

そんな蕩ける情熱的なキスと抽送に合わせて悩ましく揺れる巨乳が、少年の欲情をますます高まらせてくれた。

「沙耶ちゃんっ、好き……んっ、大好きだよ!」

人前だということも忘れて愛を訴えながら、左手を恋人の腰に回して抱き寄せる。

右手は胸に伸ばして悩ましく揺れる巨乳を鷲掴みにし、荒々しく揉み解しながら絶頂の瞬間へ向かってひと突きずつ力を込めて腰を振った。

「あはつ、はあんっ! しゅきっ、わあ、わらしもつ、しゅきですつ、らあ、らいしゅき

ですからあ、中……子宮に早く……せえ……えきいっ、劍くんの精液で、卵子受精させてくださいっ、ひんうっ、ああ、赤ちゃん……欲しい……あふあああっ」

「うんっ、出すよ。全部子宮に出しちゃう！ 沙耶ちゃんの子宮に精液出すっ!!」

口内に広がるお嬢さまの甘ったるい香りと味わい、手の平に伝わってくるパン生地のような乳房の心地よい揉みごたえ。何より抽送を繰り返す肉幹から脳天まで昇ってくる狂おしい痺れで意識が酩酊してきた。

人前だという羞恥も吹き飛び、無我夢中で愛しい幼なじみの膣奥を突き上げる。

吐精をねだるように絡みつく壁面の皺をエラの張った雁首で抉り、その勢いのまま行き止まりの子宮口を打った。

ジュボオッ、ジュププウッ、ズリユウウウッ！

ちょうど沙耶も腰を落としてきていて、小さな肉室を横長に潰してしまおうような強さで押す。その強い衝撃で我慢の糸が容易く断ち切られ、ビクッと大きく肩を震わせる。

「出るうっ、出ちゃ……ううっ、イク、僕……出るっ、あああっ!!」

ドップリユッ、ビュルルッ、ビュルルルルッ！

放たれた熱液が子宮の内壁を打ち叩くのに合わせ、受け止めるロングヘアの生徒会長も強く少年の唇を吸いながら絶頂の波に飲み込まれていった。

「ひぐうっ、くりゆっ、はあ、あちゅう……んふうっ！ イク……わらひもおっ、劍くん

の精子い……受精してイキまあつ、んちゅつ、はむうううつっ」

意識朦朧とやや垂れ気味の穏やかな瞳を細め、全身を痙攣させる生徒会長。

膣口を呼吸に合わせて何度も収縮させて幹胴を噛み締めながら、注がれる熱液の感触にうっとり酔いしれていた。

その激しさに吞まれた見学者達は呻き声すら上げず、繋がる二人の姿を射貫くように熱心な眼差しで見つめている。

「はあ……あはあつ、はあ、つい夢中になってしまつて申し訳ございません。これが子作り……んつ、ご覧になつてください。子宮に精液を出していただいた証です……」

数呼吸後、やっと射精が終わりかけたタイミングで女子生徒達のほうを振り向いた生徒会長が、再び自らの手でスカートを捲つて結合部を晒す。貫く剛直で丸く押し広げられた穴口からは、早くも愛液と混ざり合つた白濁が吹きこぼれてきていた。

「精液が沙耶さんの女性器……オ、オマ○コ……から」

「本当に子宮へ……あの濃くてドロドロのお汁が。気持ち……いいのですか？」

「はあ、はい……熱いお汁で子宮の中が蕩けてしまひそう。愛しい男の子と結ばれた証をお腹に授かれたかも知れないと思うと……ほっぺが緩んでしまひます」

答えながら余韻を分かち合いたいと言わんばかりに、剣へもたれかかるお嬢さま。

まだ高鳴っている鼓動が落ち着くまで、このまま互いの温もりを感じ合っていたい。

そんなまったりした甘い空気を、順番を待つ爆乳お嬢さまが吹き飛ばした。

「はい、もうそこでおしまいっ！ 射精してもらったら交代って約束したでしょ」

傍まで歩み寄ってきた桃花が、抗議しながら余韻に浸る剣の頭をポカリと打つ。

「あうっ、って、な、何で僕を……」

「いつまでも私を待たせるからよ！ 文句があるなら……今から仕返ししなさい」

真っ赤な顔で視線を逸らして言う桃香。

彼女の言葉の意味をすぐには理解できず、剣は首を傾げるしかなかった。

そんな少年へ、顔を赤らめた爆乳お嬢さまがそつと耳打ちをする。

「わ、私にしか教えられないこと……あるでしょ。色々な性癖があるって」

——ズップウツ、ズリユツ……グニイツ！

「はうっ、くううう！ あはあつ、そつ、そええ……ちゆうっ、ちゅぶれりゆう……乳首グリグリされてっ、はへっ、んんっ、ふあああああ！」

少年の胸板へ背を預けた桃香が、嬉しそうに緩みきった表情で喘ぎ悶える。

既に膣壺は猛り狂う剛直で埋められ、おまけに少年の手で爆乳の先端を飾る桃色突起を乱暴に捻り転がされているのだ。

（本当にこんなの見せちゃっていいのかな）

求められるまま荒々しく桃香を責めている剣は、目を見開いて言葉を失っている見学者の面々を見てさすがに不安を隠せなかった。

「剣、いいからあ……も、もつと……んうっ！ こ、これはみんなに性癖を教えるために必要なことなんだから。遠慮しないで……強くつ、もつと潰しなさい」

「わ、わかったよ。……どうなっても知らないからね」

軽く腰を揺さぶって抽送を続けながら、少年は頭を空っぽにして戸惑いを振り払い、摘んだ乳首を力任せに引つ張る。

球状の爆乳が細長く伸び、肉粒がすぐ真つ赤に充血した。

正面で見守る女子生徒達が痛々しそうに顔を顰める中、当事者である桃香だけがだらしなく緩めた唇から悦びの声を上げる。

「ひぎいっ、くうう！ はあっ、そっ、ちっ、乳首……ジンジンっ、すごおっ、はあ、痛いの……乳首虐められりゅのっ、かあ、感じるっ、ふあっ、はへええっ♪」

男子に対しても臆することなく高圧的なお嬢さまが、こんな乱暴な扱いを受けて嬉しそうに喘ぎ悶えているのだ。見守るお嬢さま達が困惑するのも当然だろう。

「あの……んっ、虐めるつもりでやってるんじゃないからね。こ、こうすると桃香が凄く感じて喜んでくれるから。だから、その……」

「はあ、はつきり言っいいいわよ。私がどういいう趣味か……みんなの前で言いなさい」

事情を暴露していいのか悩んでいた剣を、ぐったりとした爆乳のお嬢さまが促す。

肉幹を啜えた膾壺にもギュッと力が籠もり、期待に壁面の皺が艶めかしく蠢く。

痺れる快感で理性のタガが緩み、少年は覚悟を決めて叫んだ。

「子作りには色々なやり方があるって……どんなことをされると気持ちよくなるのかっていうのは個人差があるんだ。性癖っていうんだけど、そ、その中に……虐められると凄く感じちゃう趣味……マゾっていうのもあるんだ。桃香が……それだよ！」

剣の説明を聞いた見学者達が一齐にどよめきの声を上げる。

学園内でも有数の強気で気高いお嬢さまに限って、そんなことありえない。

そんな困惑がヒシヒシと伝わってくる中、恥ずかしい性癖を暴露された爆乳お嬢さまは嬉しそうに腰をくねらせて何度も頷く。

「そう、マゾ……や、優しくされるのもいいけど……好きな男の子に愛情たっぷり虐められるのも気持ちいい……私、そういうの好き……大好きいつ！」

恍惚と叫ぶお嬢さまを、女子生徒達はまだ半信半疑の目で見ている。

そんな視線をもどかしく感じるのか、桃香は眉を顰めて切々を叫ぶ。

「剣、もつと、もつと激しく……言い訳しようないくらい、虐められて感じちゃう私の姿をみんなの前で晒させてっ。さつき叩いた分、百倍……せえ、千倍で返してえっ！」

「わかってる……はあ……これで……くっ、ううっ」

マゾお嬢さまを満足させたい。そう繰り返し心の中で叫んだ自らの優しさを封じ込め、尻房を腰骨でスパンキングするような荒々しい抽送に切り替える。

摘んだ乳首もより乱暴に引つ張り、指の間で力いっぱい捻り潰す。

ズリユウツ、ジユツプリユツ！ パンツ、パチインツ！

「あぐうつ、ふあああつ！ おひりいつ、こつ、腰でパンパンされりゆのつ、いい……ヒリヒリして……気持ちいいつ、はへつ、んんつ、あああつ!!」

桃香は乾いた打撃音に合わせて歓喜の声を上げ、膣内の締めつけも強くなってきた。

膣粘膜も嬉しそうに奥へ向かって波打ち、力任せに往復している幹竿が扱かれる。

「桃香、か、感じすぎ。みんなの前で恥ずかしい性癖ばらされて、乳首もオマ○コも乱暴に虐められるの……そんなに好き？ 感じるの？」

快感で頭が茹だつてきた剣は、言葉遣いを荒くしてマゾお嬢さまをなじる。

そんな声のひとつひとつに桃香は大げさに肩を震わせ、表情を卑猥に蕩けさせた。

演技でも何でも本当に被虐快感に浸っている。そう理解せざるを得ない爆乳お嬢さまの痴態に、見学者達のどよめく声も大きくなってきた。

「いいのつ、気持ちよく子作りするためなら、はあ、恥ずかしい性癖でも大丈夫！ 一緒に感じ合えるなら悪くない……だから、み、みんなも自分にそういう趣味があつても隠さないで、好きな男の子に晒しちやいなさいっ!!」

大みたいにだらしなく舌を伸ばして息を切らす桃香は、もっともらしい言葉で自分の趣味を肯定しながら急速に絶頂へ昇りつめていつているようだ。

竿肌を舐めしやぶる壁面の痙攣が加速し、子宮口が降りてきているのか膣道の奥行きがわずかに浅くなった。

「本当に……恥ずかしいことで感じすぎだよ、桃香！ お仕置き……子宮も思いきり叩いてお仕置きしてあげるからイッちゃえ。くっ、うううっ!!」

離したくないと狭まる膣壁を捲るように擦りながらペニスを引き抜き、膣口から肉傘が飛び出しそうになった直前で止めると、反動を生かして力いっぱい奥を突いた。

同時にダメ押しとばかりに乳首粒を絞るように引っ張ってやる。

ズリユツ、ズップツ、ズブブブツッ！ グチイッ!!

「おふっ、おとおお！ しいつ、子宮も乳首もグニツって……イグッ、わらひいつ、ジンジン……いつ、痛いのでイク……ひぐっ、くうううっ!!」

足先をピンと伸ばし、穴口を熱く締めて肉砲の根元を捕らえながら昇りつめる桃香。

その刺激で少年も我慢できなくなり、勢いよく射精を始める。

どぶりゆううっ、びゆるるるっ、びゅっく!

「はへえっ、あはあっ、きい、きたあ……子宮の入口、ビュルビュルって精液で叩かれてお仕置きされてりゅっ……受精させられてるのっ、イッ、イイ……あはっ」

亀頭を奥の粘膜へ密着させたまま、剣は被虐絶頂の余韻に蕩けるお嬢さまの胎内へ遠慮なく白濁をぶちまけていく。

ぐったりと脱力した桃香は自慢の爆乳が盛大に揺れるくらい息を荒く切らせ、何度も肩を震わせてその快感の激しさを見守る女子生徒達へアピールする。

その間も膣口は絶頂の波に合わせて収縮を繰り返し、入口からは押し出された淫液がまるで粗相をしたかのような勢いで盛大に噴きこぼれてきた。

「も、桃香さんが……あんなにはしたないお顔で……」

「気持ちいいんでしょうか、本当に。乱暴に……されて……」

大半が信じられないという表情をしている中、頬を苺のように赤々と染めて落ち着きなく身じろぎしているお嬢さまもいた。彼女達は桃香と同じ資質を持っているのだろう。

(意外というんだ、マゾの人って……)

「ど、どお……はあはあ……優しくしてもらっただけじゃなくて、こ、こういう激しいのお……虐められるのも素敵でしょ。本当、色々な感じ方あるんだから」

剣が驚いている間に、桃香が意識朦朧としながら気丈に締め付けの挨拶をする。

それを受け——静かに順番を待っていたツインテールの才女が前に出た。

「桃香さんの言うとおり。人間は様々な子作り……性的快感を求め、多くの文化を生み出してきた。その中の行為や道具のいくつかを実演で紹介したいと思う」

「ぶ、文化って……」

「まずは性交の種類について。膣……オマ○コでの実演は沙耶さんと桃香さんがしてくれ
たから。私は……別の肉穴を使った方法を見せたいと思う」

至極真面目な口調で説明しながら、クールな才女は割れ目から滴る愛液を指ですくい取
り——それを自らの菊穴へ熱心に塗り込んでいた。

「ひぎつ、ああっ……み、見える……？ んっ……ああっ」

桃香と同じように背を向けて少年の膝に座る才女は、息苦しそうに声を震わせながら見
学者達へ見せつけるように膝を曲げた足を大胆に抱え広げた。

スカートもお腹まで捲かれてあらわになった股間。剣の怒張は彼女が指で丹念に撫で解し
ていたアナルへ深々と埋まっている。

「アナルセックス……こちらの穴でオチンチンを迎え入れることも可能。オマ○コとまた
おもむき趣の違う快感を双方が得られる……」

息を切らして説明する間も、女子生徒達の視界に晒された菊穴は入口の皺を活発に蠢か
せて肉幹をしゃぶり続けていた。

（やっぱりお尻、入口が凄く窮屈だ）

根元を思いきり圧迫され、血の流れが止まってしまいそう。強烈な痺れが竿全体に広が

り、小刻みな痙攣が止まらない。

「お尻でなんて……いくらなんでも、そんな……」

「不淨な部分を愛することにより気持ちが変わると、先程仰っていましたが……」

立て続けに激しい行為を見せつけられてきた見学者達も、驚きを隠せない様子。

その熱っぽい視線で結合部を観察されている羞恥興奮も合わさり、このままロクに動くまでもなく達してしまいそうなくらいだ。

「はあ、みーちゃん。僕、あんまり持ちそうにない……かも」

「んっ……私も同じ。だから……説明を早く進める」

そんな早くも切羽詰まってきている少年へダメ押しとばかりに、美蘭はふとももを掴む手を離し、すぐ傍らに置かれていた鞆の中から何かを取り出した。

「子作りを助けるための道具も、古く……紀元前の頃から存在していたとされる。代表的なものはこちら……日本では張り形と呼ばれている、男性器を模した棒」

才女が根元を掴んで見せつけるように掲げたそれは、説明どおりペニスの形を模した淫具——現在はバイブレーターと呼ばれているものだ。

「それ、大人のおもちゃ……ど、どこで……」

「今日のために通販で手に入れた。長い歴史のある道具がどのようなものか、実際に経験してみたかったから。……使い方はオチンチンの代わりにこうして……あっ」

そんなものまで用意していたのかと驚く少年を横目に、好奇心旺盛な才女はパイプの先を愛液塗れの割れ目へ押し当ててる。

ジュプリユツ……ヌチュツ……ジュチュウツ!

太さが少年の怒張よりひと回り小さかったこともあり、淫具は震える蜜壺へヌルリと勢いよく滑り込んでいった。

「うあつ、ああつ! な、中……狭くっ……くううっ!？」

膣道を奥まで埋めたパイプの感触が、隔壁越しに腸道を貫く屹立に伝わってきた。

グイグイと押してくるせいで、淡い締めつけだった腸内が奥のほうまで窮屈になる。

「さ、最近の張り形はモーターが仕込まれていて……んふっ、はあはあ、こ、こうして動かすことができる。今、スイッチを……」

「っ……待ってみーちゃん!」

今、振動までさせられたら本当に我慢できなくなる。

慌てて止めようとしたときには、もう才女の指が根元にあるボタンを押していた。

——ブブブブッ!

「くふっ、はあ、震えてる……オマ○コの中で……あぐっ、あうううっ」

「うああつ、これ……すっ、すご……んんっ!」

モーター音を響かせながら膣内でパイプが大きいくうねる。

隔壁が盛大に波打って腸内の剛直を圧迫してきた。

普通の抽送では決して味わえない激しい動き。剣は本能的により深い快感を求め、甘く痺れる腰を動かし始めた。

ズチイツ、ズップツ、ジュリユウツ、ヌップウウウツ！

膣内のバイブを押し返しながら剛直が腸道を往復し、絡みつく粘膜壁を擦る。

「はあっ、んんっ！　そ、そう、動いて……こうしてオマ○コとお尻を同時に埋められることを二穴責めと呼ぶ……かなり過激な性交……ひうっ、ふああああっ♪」

どうにか解説を続けていた美蘭も、淫具と肉幹で前後の肉壺を掻き混ぜられる快感に抗えずにガクガクとM字に広げた両脚を震わせながら喘ぐ。

潤む瞳を切なそうに細め、押し寄せる絶頂の波に菊穴を形作る皺が熱く震える。

「みーちゃん、ぼ、僕、もう……はっ、これ……凄すぎ……ああっ」

「はあ、私も……そ、想像以上で……無理、我慢があ……ううううっ！」

悶える才女が強烈な快感電流を堪えるように背筋を仰げ反らした刹那、二穴がそれぞれほとんど同時に収縮した。

壁越しにぶつかるバイブの振動がより鮮明に屹立へ伝わってくる。

「バイブ、当たって……ううっ、やばっ、ああっ、出るっ！　お尻に出すよっ!!」
敏感な裏筋が強く刺激され、我慢できず括約筋に力が入った。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!